

報告

地域産業研究会その2 平成20年度地域産業研究会現地見学会報告

リゾートの灯は消えても…(空知管内浦臼町)

地域産業研究会地域活性化分科会 柴田 登

1. はじめに

8月30日(土)、昭和60年代から平成初期にかけてのバブル期の後半、計画途中で破綻した「ウラウスリゾート」の跡地を訪れ、その後の事業の展開を見てきました。

2. 見学会の概要

スキー場とゴルフ場のセットで計画された「ウラウスリゾート」の約千ヘクタールの農地は、その後大半はワイン用ぶどうの畑と農業生産法人の農地として利用されており、今回はそれらに関連する施設を見学すると共に、リゾート破綻からその後処理を含めこの春まで町長を勤めた山本要氏に講演を戴きました。

(1) 見学先

- ① 尙鶴沼ワイナリー
- ② ぶどうの丘恵彩館(株)北海道アグリマート
- ③ 農業生産法人(尙)神内ファーム 21
- ④ 樺戸地区田園空間博物館
うらうすエリア農機具展示施設

(2) 前浦臼町長山本要氏の講演

山本要氏はウラウスリゾート計画中の1988年、当時の町長の急死で急遽町議から町長に立候補し当選。この春まで5期20年間町長を勤められました。

3. 尙鶴沼ワイナリー

日本一の広さ(447ha)のワイナリーで50種類のワイン用ぶどう(主にイヨーロッパ系)を栽培している。

代表取締役の今村直氏に説明を伺いながら廻った。

昭和40年代後半、農業構造改善事業の一環で当時の堂垣内北海道知事がワイン用ぶどうの栽培を奨励し、浦臼等幾つかの町村がそれに取り組んだ。何年か試行錯誤が続いたが、ドイツ人技師の指導で栽培技術が定着し、1980年には小樽の北海道ワイン(株)が製品第1号(ミュラー・トゥルガウ)を出荷した。

当初は11ha余りでスタートしたが、徐々に拡大し、リゾート破綻後にその農地を約250ha購入して現在の規模になった。

重粘土質の土地に暗渠を深く張り巡らし、土壌改良を行い、皮や枝等の残渣は堆肥化して循環型農業を実践しながら、30名の従業員体制で30年後、50年後を見据えた土造り、畑造りを進めている。

この園地のぶどうは垣根式の栽培方法を採用しており、リゾート破綻後に購入して園地にした所は国内唯一の大型のハーベスターで収穫から剪定までを行って機械化と効率化を図っている。しかし、春先の垣根式に樹形を整える作業、収穫後の降雪対策と翌春に備える手入れは人手に頼らざるを得ずそれが大変とのこと。

ハーベスターで収穫したぶどうはコンテナに移し替え、農産物加工施設「ぶどうの丘恵彩館」へ運んで搾汁し、液体で小樽の北海道ワイン(株)へ運ぶことで運搬コストの削減にも繋がっている。リゾート以前からの園地も苗木の更新に合わせハーベスター仕様に変えて行く計画である。最近では野うさぎ、ねずみ、アライグマ、鹿等による食害も増えてきており、園地が広いだけに対策も取り難いのが悩みとか。

最後に直売所で今村氏から国産ぶどう100%等品質に重きをおいたワイン作りの話を伺いながら「鶴沼」の名を冠した限定販売のワインを試飲させて戴いた。

4. ぶどうの丘恵彩館(株)北海道アグリマート

鶴沼ワイナリーの園地を更に少し上がった丘にあり、収穫期には一日に30tのワイン用ぶどうを搾る搾汁工場とミニトマト等のジュース工場が併設されている。

ジュース工場は他にトマトやワイン用ぶどうのジュース化、それらを材料にしたケチャップ、ジャム、麺等の食品加工を行っており、少量高品質の商品で大手外食チェーンや首都圏の一流ホテル等を中心に顧客開拓を行っている。しかし商品は一過性の物なので、今後はトマトジュースの炭酸飲料、米のジュース、アスパラガスの食品加工等、地域の特産品を使った新商品の開発に取り組みながら現在の年商2億円を5億円まで伸ばしたいと代表取締役の佐竹氏は目標を語っていた。

5. 農業生産法人(有)神内ファーム 21

消費者金融会社プロミスの会長だった神内良一氏が1997年に設立、農業生産法人の認可を取得してリゾート破綻後の農地約600haを購入、翌年から農産物の生産販売を開始した。現在はバナナ、マンゴー等の南方系果実や水耕栽培の葉物野菜をハイテク管理の温室で栽培する他、黒毛和牛の繁殖・肥育等、高品質化と生産・加工・販売の一貫体制による農業の新しいビジネス形態の創出を目指している。

生憎土曜日は社員の方々が休みで園路からの施設見学。南方系果実を栽培するフィルムハウスや徹底した機械化・無人化の植物生産工場が何棟も立ち並び一方、黒毛和牛、馬、綿羊等の畜舎とそれらを取り囲む様に広がる放牧地、訪問者の目を和ませるラベンダー畑や果樹園、洒落たデザインの管理施設や新規就農を目指す研修者用の住居等は、遠く広がる空知の田園風景とは好対照の新時代の農業生産施設群とでも言うべき景観を生み出している。

6. 田園空間博物館樺戸地区うらうすエリア

農機具展示施設(旧鶴沼小学校)

機械化以前、家内制手農業?の時代の農機具や日常生活用品等が教室毎に展示され、当時の農家の暮らしぶりを紹介している。作業毎に異なる様々な機

械や道具、今なら購入品で済ませる物でも藁等の副産物から作って使っていた時代、そしてそれらを作る道具類、貧しい中にも茶の間の団欒を彷彿とさせる家具の類。

夕日の射す教室でひとときのタイムスリップ。

7. 前町長山本要氏の講演の概要

戦後63年の中で見落として来た物を見直す必要。

今後、団塊世代の発言と行動が重要になってくる。地方交付税制度は金のある内は良かったが、今は国も地方も金の無い時代、地方主権型社会実現の為に、合併で一番基礎になる形をもう少し大きくする必要。合併協議会で歴史・文化や地域で培った人脈の活用等は残される。議論もせずに心配しては駄目。

リゾートが実現していたら今頃浦臼も財政再建団体。計画地は戦後入植した所で土地改良の技術も無く生産性も低かった。破綻後の土地は町出資の第三セクターで保有していたが、北海道ワイン(株)と農業のプロジェクトを持って来た神内氏に買って貰い、銀行には残った債権を放棄して貰った。この時期、浦臼出身の数人の会社経営者との人脈が役立ち、助けて貰ったことが大きく、今日の事業の展開にも繋がっている。

神内氏と鶴沼ワイナリーの今村氏については、「良い物を本気でやるならここまでやらねば」と思わせる程、農家の品質意識に大きな刺激を与えている。

農家は減反等の政策を鵜呑みにしてきた依存体質から抜けていない。大規模経営の指導も良いが、耕作放棄地が出る前に民間の力を借りる方策も必要。

浦臼には明治半ばに徳島県人が藍を、高知県人が養蚕技術を持って入植して来た。高知の自由民権運動家武市安哉は国会議員の職を辞して明治26年に移住、彼の聖園農場と聖園小学校(現浦臼小学校)は今も残る。明治30年に家族と共に移住して来た坂本竜馬の甥・直寛は石狩川の水害救済に尽力した人でもある。

浦臼は昔の教科書に川の蛇行の例として写真で紹介された程、洪水に悩まされた所。昨年浦臼で開かれた石狩川サミットで丹保憲仁先生から、21世紀の

水環境を考えた時の、欧米に最も近い北海道、その中心の空知、そして今後の可能性について示唆を戴いた。

町民には先人の開拓の歴史、今後の可能性に誇りを持って農業を続ようと呼び掛けている。

8. まとめ

世間を騒がせる食の偽装は遂に米にまで広がってしまった。今回私たちは地域の生産物から安心安全な本物を作ろうという人たちの努力を見た。そんな地域の生産者の本気を広く伝え、支援することも私たち技術士の社会貢献の一つではないか。浦臼町の皆さんに感謝。

(文責：地域産業研究会 柴田 登)